

拙著『日露領土紛争の根源』にたいするロシアの反応

(7月31日、2004、2011年若干改定)

長瀬 隆(川崎、日本)

昨年5月下旬上記書(この先では『根源』と略称する)の草思社による刊行の後、私は、本書を7月のウラジオストーク・ピエンナーレで紹介するよう中本信幸氏から提案をうけた。

本書の最大の価値は、第一に1854年のシーボルト『日本』の露訳が、間宮林蔵らの榎太(が島であること)の発見の業績を完全に抹殺する、改竄であることの指摘にあった。また第二にチャーホフがこのことを知っていて、1894年の『サハリン島』の執筆にさいしては、そのうちの日露関係史の全部をシーボルトのドイツ語原書に依拠して行なった、ことの指摘にあった。

そして最後に、この二つの発見に基づいて、今日までの日露関係史を、領土紛争を中心に全十章に概括したことにあった。それでそのように要約した露文レポートを作成し、中本氏に携行してもらったのである。

また私は、本書の成立に小さくない係わりをもったサハリン大の歴史学教授、ヴィソコーフ氏にたいし、右レポートと手紙を付し、2冊を、ユジノサハリンスクに赴任する新任の総領事夏井重夫氏に携行・贈呈していただいた。

前後して日本ユーラシア協会内にチャーホフ没後百年記念事業実行委員会が発足し、私も委員の一人となりこれに当たることになった。2004年がまさに没後百年にあたるためのものであって、本年9-10月にかけて3週間日本近代文学館で行う展覧会と講演会およびシンポジウムを目的としたものである。

対応する動きは、当然のことながら、本国のロシアにも存在した。チャーホフが土地を買い、そこで暮らしたモスクワの南メリホヴォの一画は、今日そのまま残されていて、博物館と禁猟区となっている。そこで「メリホヴォの春」なる演劇祭が行なわれることとなり、5月下旬私は中本氏とともにそれに赴いた。またかねがね関心のあった、生圍の地、タガンロックにも足を運んだ。

出発に先だって、これもまた中本氏から先のレポートをチャーホフ中心に書き直し携行するよう助言された。それで「チャーホフ没後百年は一日露戦争勃発からの百年」(後に「チャーホフと日露戦争の百年」と改題)というA4露文11枚(和文でもほぼ同量)の文書を作成し携行した。

それは『根源』のうちチャーホフ関連の部分に加えて、『サハリン島』における日本関連の叙述が、その後の作家の文学的展開にどのような役割を果たしたかを述べ、『桜の園』の結びに現われている日露戦争の予感にまで言及したものであった。

1ヶ月後の6月下旬に再び同じメリホヴォでモスクワ大および科学アカデミー主催の「チャーホフ没後百年記念国際学術会議」が行なわれることになっていた。

その報告者に名乗りをあげるために、私はそれを携行したものであり、実行委員長であるモスクワ大のカターエフ教授に手渡した。そしてその際、同教授から、発表には時間の制限があるので、枚数を短縮するように求められた。

かくて私は帰国後、『根源』の冒頭三章、つまりシーボルト『日本』の露訳における改竄とそれにたいするチャーホフの抵抗に限定し、3枚の文章を作成した。

けだしそれこそは、私の発見にかかわる、ロシアの出来事でありながらロシアではだれによっても明かされてこなかった、前代未聞の私の発見にかかわることであるからだ。この文に続いて、この先で和および露文で掲げることとなる「ア・ペ・チャーホフの『サハリン島』に寄せて」という文章がそれである。

私はまた質疑応答にそなえ、先の11枚の再チェックを行ない、「チャーホフと日露戦争の百年」と改題し、在日のロシア女性大学講師の協力をえて、語学的にも完全なものにした。

ところがこの間に学会実行委員会は、全報告予定者の報告要旨を網羅した論文集『チャーホフ没後百年』(表紙)を制作刊行していた。そしてそれを私は会場に到着して受け取ることとなった。

私の先の11枚は、私には不満な形で要約され、それに合わせて表題まで「チャーホフの諸作品における『日本の痕跡』」と改変されていた。シーボルトとチャーホフの関連について述べた、肝心要の部分が完全に削られているのである。

拙文は、学会が許容できる範囲内に矮小化されていた。それは百五十年前のシーボルト『日本』の改竄と酷似していた。

積極面がまったく無いわけではなかった。『サハリン島』のなかに「ロシア人たちが愛好しない諸頁がある」ことを認めた箇所、また私の『根源』の刊行が紹介されている箇所がそれである。

しかし私の11枚が一種の改竄を被っていることは、二つを比較対照されればすぐに知られるのである。

一方私が新たに携行していた3枚は、あたかもこれを予想していたかのように、まさに削除された箇所を中心にすえて執筆されていた。

それで私は、実際に行なわれた私の発表においては、論文要旨集の拙文は、それはそれとして読んでもらうことをお願いして、用意してきた文章のタイトルを述べ、それに基づいて話したのである。一石は十分に投じられたのであり、波紋は小さいものではなかった。

改竄的要約を行なった責任者であるカターエフ教授は、会期中私とは視線が合うのを避け続けた。また私が発表した分科会の司会者であったプーコヴァ女史は、閉会にさいしての報告で、私の実際の報告については、口ごもり極めて短くしか触れなかった。シーボルトと間宮林蔵の名を口にしなかった。しかしこれはわが日本グループのオルガナイザーである中本信幸氏によれば「成功だった」のである。私はロシア以外の国々の人々からは口頭で熱い支持と関心の表明を受けた。しかしロシア人の執行部の人々からは声をかけられることなく、また私も同様に帰国した。

彼らはみなチャーホフ研究の第一人者たちなのであるが、シーボルトの名も事績も知らなかったと思わ

れる。いわんやその百五十年前の露訳について知らず、チャーホフがドイツ語原書に依拠して書いていることを知らなかったのだ。

したがって私の原11枚のその箇所は、まったく初耳で衝撃であり、調査し終えぬ状態でそのまま掲載するわけにはゆかなかったのである。

彼らは、『サハリン島』の日本関連の記述は、それを恐れ敬遠しつつ、今日まで専門家として生きてきた。もっともそれが何時かは避けえない事態になるとは予想していなくはなかったようで、それが日本からもたらされることも予感していたようでもある。

そしてそれが、チャーホフ没後百年にしてかつ日露戦争勃発から百年にあたる本年、旧樺太に生まれ育ってソ連による占領支配を体験し、引揚者となった私によって惹起されたのである。

メリホヴォの後、7月札幌で北大スラブ研究センター主催の国際学術シンポジウムが行なわれ、その分科会の一つで、冒頭に述べたサハリン大のヴィソーコフ氏が学校教科書『サハリンの歴史』の新しい第4版について報告した。

コメンテーターとなったのは訳者の一人である旧知の釧路公立大の松井憲明教授であった。氏は、日本側がサハリン＝樺太の歴史について見るべきものを一つも発表していないことを強調し、それとの比較でヴィソーコフ氏の仕事を高く評価した。私はこれに多大な疑問を感じた。

日本側は樺太連盟機関紙を中心にして膨大な記録を残しており、また荒澤勝太郎の『樺太文学史』5巻のような立派な仕事も存在している。全般的な歴史書がないのは、舞台となる土地が日本領として失われているためなのである。たとえば私について言えば、樺太＝サハリンは歴史の問題とはなりえず、常に文学の問題として存在して今日に至っているのだ。

対するにサハリンのロシア側が歴史書の制作に動んだのは、その領有を正当化する必要があったがめである。ヴィソーコフが今回述べたように、そこでは戦後すぐから八十年代初頭までの長期間、「サハリンは、発見においても領有においても、はたまた移住においてもロシア人が最初である」とする歴史教科書が書かれてきたのであった。

すなわちチャーホフとは180度に対立する歴史が教えられてきたのである。かくてソ連崩壊の前後からそれを批判超克しようとするヴィソーコフらの登場となり、それが松井氏ら北海道の学者たちにより評価され翻訳されることになったのである。

崩壊後のロシアには西側のポスト・モダン、ポスト工業化の理論が大量に流入した。ヴィソーコフは、それらを吸収しつつ、マルクス主義の積極面を生かし、両者のジンテーゼ目指す、と宣言した。

ロシアのサハリンでのプライオリティの理論は破産した。サハリンには、原住の諸少数民族を始め、多くの民族が係わりをもった。したがって人間の、人類の歴史の一部としてのサハリン史が書かれなければならない、と彼は主張した。そしてそれこそが日露の関係調整にも貢献する、と彼は考えている。広大なロシアの他の地域には見られない、こうした歴史の創造に異議をさしはさむ人は少ないであろう。チェチンを暴圧しているブーチンに関かせたい理想論である。

しかしそこには、そうした歴史を作り出さずには、サハリンのロシアによる領有の継続を正当化しえない苦衷が見て取れるのである。ジンテーゼは結構だ。しかしそれは、行きつく所はアメリカによるグローバリゼーションへの屈服であるところの、諸新理論の折衷にすぎないと私は思う。

私が思うに、真のジンテーゼはロシアの歴史のなかで、とうの昔、百十年前のチェーホフ『サハリン島』のなかにすでに与えられている。「良薬は口に苦し」で、ロシア人たちが忌避してきただけのことである。

ヴィソーコフは新しい歴史を創造しようなどと努めなくともよろしい。チェーホフの記述が完全かつ全面的に正しいことを認めさえすればよいのである。それさえ為されるならば、他のすべては自然に解決されるであろう。ところが、遺憾なことに、ヴィソーコフ自身においてもそれが不徹底にしかなされていないのだ。

もっともこうしたロシア側の現状は、日本側の立ち遅れによって支えられている面がある。今日読むことの出来る三種の『サハリン島』の翻訳書が、そのいずれも、流刑問題の側面は、ロシア側の研究に依拠してそれなりの解説を与えている。しかし彼らも加え、研究者たちは、中本信幸一人を除いて、一人として日露問題の側面に立ち入ろうとはしてこなかった。

そしてこの無自覚は、今回の札幌シンポジウムでの北大教授望月恒子の報告にも現われた。まことに彼女は『サハリン島』について報告しつつ、チェーホフの日本とのかかわりについて、呆れ果てるほどに、ひとことの言及もおこなわなかったのである。

コメントターの京大木村崇が拙著につき紹介的に言及し、私との対比において彼女の欠落を指摘した。また続いて私と中本が別な角度から彼女を批判した。

彼女の回答によると、実行委員会が彼女に要請したのは[チェーホフ・サハリン・日本]というテーマで語ることだったそうである。しかしこのなかの最後の項目は、彼女の手に残ることだったので、対象からは外したとのことであった。

指摘された拙著『根源』は、報告の執筆が終わった後に読むことになり、しかし時間的に手を加えることができぬままにシンポジウムに臨んだとのことで、自分の報告がその面で弱点をもつことを認めた。

しかしこれは、私見によれば、ただたんに弱点もしくは欠点に止まらないのである。その解明なしにはチェーホフの全体像は得られず、没後百年の現代的意義は不明のままに残されることとなる、きわめて深刻な欠落なのである。

チェーホフには、その存在が知られながら、今日でもけして一般には開放されてこなかった、その晩年にかかわる一連の証言がある。すべて日露戦争からみのものであって、ロシアはこれらを長期にわたり隠蔽してきている。したがって論と研究の対象からは除外されてきた。

『サハリン島』とこれらとの関連の解明は、後期の藝術作品の解明に欠かせないことである。それらの諸作が、スターリニズムのドグマの崩壊後、広く世界的に輝きを増しているだけに、それは緊急な課題となっている。

私の報告は会議の性質上ロシア語でなされるために露文で執筆された。したがってそれに続く邦文は私自身がそれを和訳したものである。

学会報告集の「チャーホフの諸作品における《日本の痕跡》」(露文)は、述べたようにロシア側による要約である。私の訳文にぎこちない箇所があるのは、ロシア文の要約に無理があるためである。

以下に述べてきた順番に学会に関連する文章の全文を紹介する。

「チャーホフと日露戦争の百年」(露文¹、邦文)

「ア・ペ・チャーホフの『サハリン島』に寄せて」(露文²、邦文) 露文1および2は同一ファイル

「チャーホフの諸作品における《日本の痕跡》」(露文、邦文)

[トップページ戻る](#)

2
CHGHOV-NICHIROSEN
1
En-sahalin
nagase-r
kumgaki

①+②
MLL R-1

①と②
MLXV, hem

2020年5月12日